赤十字NEWS

September2011 Vol.856
http://www.jrc.or.jp
9

日本赤十字社

編集・発行／日本赤十字社　企画広報室　〒105-8521　東京都港区芝大門1-1-3　TEL:03-3438-1311　一部20円　赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

輝くヒューマニティーの精神
ナイチンゲール記章授与式

ヒューマニティーの精神をもとに、近代看護の礎を築いた英国の看護師ナイチンゲール女史。その業績を称えて、顕著な功績を果たした看護師に与えられる第43回「フローレンス・ナイチンゲール記章」がこのほど、世界の39人に授与されました。8月4日、日本赤十字社名誉総裁皇后陛下ご臨席のもとで行われた授与式では、皇后陛下自ら2人の受章者にご授与され、その功績を顕彰しました。

CONTENTS

5 6 7 8 SPECIAL 東日本大震災 活動の記録

2 TOPICS
フローレンス・ナイチンゲール記章授与式
平成24年度 看護専門学校・助産師学校 入試日程

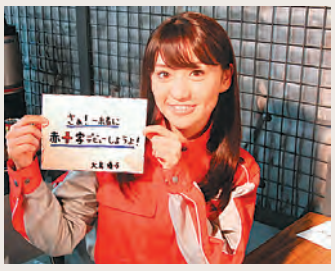
3 TOPICS
AKB全国ツアーで日赤ブース出展
証言　3・11東日本大震災

4 TOPICS
国連事務総長、IAEA事務局長と日赤社長が会談
先駆者たち ～The History～

9 10 11 AREA NEWS
全国学生献血推進代表者会議
岩手・新潟・福島・広島・千葉
栃木・北海道・静岡・東京
Voice & プレゼント ほか

12 WORLD
ケニア駐在員インタビュー
育ってきた地域保健師と赤十字ボランティア
干ばつ襲うアフリカ北東部
国際赤十字が人道支援を拡大

クローズアップ ひと



AKB48
大島優子さん

みんなの力を合わせましょう

「人は、人のことを思いやって生きているんだ」―今年５月、津波で大きな被害を受けた岩手県大槌町の避難所をAKB48の仲間と訪問。ミニライブ＆握手会を行った時、そう実感しました。

「自分たちの歌で、被災した皆さんを少しでも元気づけたい」という思いで訪ねた被災地でしたが、集まった方々からは「これからもがんばって」と励ましが。逆境にあっても、他人を思いやる気持ちを忘れない人間のやさしさに勇気づけられたといいます。

赤十字のオフィシャルメッセンジャーとしてCMに出演、バックに流れる『僕にできること』も歌っています。

『AKB48と一緒にもっとよく知る赤十字!』キャンペーンのサイトでは、AKBメンバーのメッセージを順次配信中。被災地で感じた思いがこもった大島さんのメッセージも間もなく公開予定です。

PROFILE

1988年10月生まれの22歳。AKB48がデビューした翌2006年２月、追加オーディションに合格してメンバーに。昨年６月の「総選挙」で１位、今年は２位と、ファンからの抜群の支持を誇ります。７歳から児童劇団に所属。子役として活躍してきたこともあり、AKB48内で演技派としても知られます。

フローレンス・ナイチンゲール記章授与式

南さんと村松さんに世界最高の栄誉

〈受章者の功績と思い〉

顕著な功績があった看護師に与えられる世界最高の栄誉「フローレンス・ナイチンゲール記章」の授与式が8月4日、日本赤十字社名誉総裁皇后陛下、同名誉副総裁常陸宮妃殿下、同高円宮妃殿下ご臨席のもと、東京・港区の日赤本社で行われ、皇后陛下が今年の受章者である南裕子・高知県立大学学長と村松静子・在宅看護研究センターLLP代表に記章をご授与されました。

同記章は、平時もしくは戦時において、傷病者や障害者、または紛争や災害の犠牲者に対して、偉大な勇気をもって献身的に活動した者や、公衆衛生や看護教育の分野で顕著な活動、あるいは創造的・先駆的貢献を果たした正規看護師や篤志看護補助者※に与えられます。

43回目の今回は、世界19カ国の39人が受章。南さんは災害看護の発展に大きく寄与したこと、村松さんは在宅看護の分野で多大な貢献をしたことが、それぞれ高く評価されました。

授与式では、大塚耕平厚生労働副大臣が「お二人の功績が、今後さらに、我が国の看護職の方々の一つの範になり、その精神と活動が引き継がれていくことを祈ります」と祝辞を述べました。

これに対して、受章者を代表して南さんが「ナイチンゲール女史の意思を受け継ぎ、看護の質の向上や後輩の育成のため、今後とも尽力してまいることを誓います」とお礼の言葉を述べました。

※篤志看護補助者…看護師資格を持たずに療養の世話をする者のこと

皇后陛下から記章を授与される村松さん（左）と南さん（右）

フローレンス・ナイチンゲール記章とは

赤十字国際会議の決定に基づいて創設され、ナイチンゲール女史生誕100周年を記念して1920年に第1回記章が授与されました。

傷病者の看護の向上に貢献し、人道の精神のもとに、近代看護の礎を築いた女史の偉大かつ崇高なる業績を永遠に記念し、看護活動に顕著な功績を果たした者を顕彰することが目的です。

今回を含めて世界の看護師1379人が受章。国別では日本が103人で、世界で最多の受章者を誇ります。

南　裕子さん

災害看護学の発展に寄与

1942年生まれ。兵庫県立看護大学学長時に阪神・淡路大震災で被災。救護活動に尽力した経験をもとに災害看護の体系化を訴えて、日本災害看護学会と世界災害看護学会の発足に奔走。災害看護学の発展に大きく寄与しました。日本看護協会会長、日本人初の国際看護師協会会長などを歴任。

「東日本大震災が起きた今年、受章させていただいたことは感無量です。自分でよいのかという思いもありますが、（自分の受章が）さまざまな所でがんばっている方々の励みになればと思います」

村松　静子さん

在宅看護の充実に貢献

1947年生まれ。日本赤十字中央女子短期大学（現・日赤看護大学）卒業、日本赤十字社医療センターICUの初代看護師長。訪問看護のボランティア活動に従事した後、1986年に訪問看護を専門とする看護師の民間組織「在宅看護研究センター」を設立。以後、在宅看護を実践しながら、その充実や研究、後進の教育に情熱を傾けてきました。

「改めて責任の重さを感じるとともに、しなければいけないことがまだたくさんあると自覚しています。看護の原点は『在宅』にあります。これからも、絆や心の大切さを、看護を通じて若い方々に伝えていきます」

看護学生から拍手を受ける受章者のお二人（日赤本社玄関前）

平成24年度　赤十字看護専門学校および助産師学校の入試日程

看護専門学校

地　域	学校名	募集人数	入試区分	試験日（一次）	試験日（二次）	合格発表（一次）	合格発表（二次）	連絡先
北海道	伊達赤十字看護専門学校	30	推　薦 一　般	H23年11月25日 H24年2月2日	H24年2月3日	H23年11月30日 H24年2月9日		0142-23-2350
	浦河赤十字看護専門学校	30	推　薦 一　般	H23年10月21日 H24年2月2日	H24年2月10日	H23年11月1日発送 H24年2月3日発送	H24年2月17日発送	0146-22-1311
宮城県	石巻赤十字看護専門学校	40	推　薦 一　般	H24年1月20日	H24年2月3日	H24年1月23日	H24年2月6日	0225-92-6806
埼玉県	さいたま赤十字看護専門学校	40	推　薦 一　般	H23年11月18日 H24年1月22日	H24年1月24日	H23年11月29日 H24年1月23日	H24年2月1日	048-852-7927
千葉県	成田赤十字看護専門学校	30	推　薦 一　般	H23年11月8日 H24年1月21日	H24年1月24日	H23年11月15日 H24年1月23日	H24年2月1日	0476-22-3000
新潟県	長岡赤十字看護専門学校	50	推　薦 一　般	H23年11月1日 H24年1月17日・18日		H23年11月5日 H24年1月30日		0258-28-3600
長野県	長野赤十字看護専門学校	40	委　託 一　般	H23年11月24日 H24年2月2日・3日		H23年12月9日 H24年2月10日		026-226-4826
	諏訪赤十字看護専門学校	40	推　薦 一　般	H23年11月8日 H24年1月6日		H23年11月16日 H24年1月14日		0266-57-3275
富山県	富山赤十字看護専門学校	40	推　薦 特別選抜 一　般	H23年11月4日 H23年11月4日 H24年1月12日・13日		H23年11月22日 H23年11月22日 H24年2月1日		076-442-0844
滋賀県	大津赤十字看護専門学校	40	推　薦 一　般	H23年11月18日 H24年1月19日		H23年12月1日 H24年1月30日		077-522-9646
京都府	京都第一赤十字看護専門学校	40	推　薦 特別選抜 一　般	H23年11月17日 H23年11月17日 H24年1月17日		H23年11月29日 H23年11月29日 H24年1月30日		075-533-1269
	京都第二赤十字看護専門学校	40	推　薦 特別選抜 一　般	H23年11月17日 H23年11月17日 H24年1月17日		H23年11月29日 H23年11月29日 H24年1月30日		075-441-2007
大阪府	大阪赤十字看護専門学校	50	推　薦 一　般	H23年11月16日 H24年1月24日	H24年1月25日	H23年11月28日 H24年1月24日	H24年2月6日	06-6774-5055
兵庫県	姫路赤十字看護専門学校	40	特別選抜 一　般	H23年11月5日 H24年 1月18日・19日		H23年11月22日 H24年2月3日		079-299-0052
和歌山県	和歌山赤十字看護専門学校	50	推　薦 一　般	H23年11月17日 H24年1月19日	H24年1月20日	H23年11月24日 H24年1月20日	H24年1月25日	073-422-4171
岡山県	岡山赤十字看護専門学校	40	推　薦 特別選抜 一　般	H23年10月30日 H23年10月30日 H24年1月19日		H23年11月5日 H23年11月5日 H24年1月25日		086-223-6800
愛媛県	松山赤十字看護専門学校	40	推　薦 一　般	H23年11月8日 H24年1月23日	H24年1月26日	H23年11月18日 H24年1月25日	H24年2月1日	089-924-1112

助産師学校

地　域	学校名	募集人数	入試区分	試験日（一次）	試験日（二次）	合格発表（一次）	合格発表（二次）	連絡先
東京都	日本赤十字社助産師学校	40	推　薦 一　般	H23年11月21日 H24年1月6日		H23年12月1日 H24年1月20日		03-3400-0112

☆募集要項については各校へお申し込みください。また、日本赤十字社のホームページ（http://www.jrc.or.jp/nurse/search/senmon/index.html）から各校のホームページをご覧いただけます。

AKB48 2011全国ツアーコンサート

―― 全国14都市29公演で日赤ブース出展 ――

赤十字ＣＭソング「僕にできること」を熱唱するＡＫＢ48・チームＫ

赤十字ボランティア290人がＰＲ活動展開

「ＡＫＢ48と一緒に赤十字を応援してください！」――赤十字オフィシャルメッセンジャーを務めるＡＫＢ48の２０１１年夏の全国ツアーコンサート（７月22日～８月31日）の会場で、ＡＫＢファンから選ばれた赤十字ボランティア計２９０人が来場者へ赤十字のＰＲ活動を行いました。

ボランティアは赤十字検定全問正解者！

ボランティアの皆さんは、キャンペーンサイト「ＡＫＢ48と一緒にもっとよく知る赤十字」で実施している「赤十字検定」のマスターコースに挑戦し、全問正解した方の中からの当選者です。

全国14都市、29公演のツアーコンサートには各回10人ずつのボランティアが参加。会場に設けられた日赤ブースで、その場でメールマガジンに登録してくれた方にＰＲグッズを配付したり、赤十字活動資金の募金呼びかけなどに協力し、活動終了後はコンサートを楽しみました。

ボランティアの鈴木さん（写真右）は「震災で深いこころの傷を負った子どもたちへの長期的ケアも日赤には期待したい」と語ります

ＡＫＢメンバーの救護服姿は印象に残りますね。日赤のイメージとも合っていると思います」と〝ＡＫＢ効果〟の手応えを語りました。

ＡＫＢ効果に手応え

ツアーの皮切りとなった埼玉公演（西武ドーム、７月22～24日）にボランティアとして東京都から参加した相澤昭吾さん（22）は「大きな声を出したり、知らない人にＰＲするのは大変」と汗を拭いながらも「ＡＫＢ48で日赤の堅いイメージがほぐれて親しみやすくなったと思う」。

同じく都内から参加した小島冴夏さん（22）は「（ポスターなどにデザインされる）

被災者もボランティア参加

８月12日の仙台公演には、津波で母親と祖母、叔父を亡くした宮城県女川町出身の鈴木大介さん（20）がボランティアとして参加しました。

震災後、横浜市内の短大を退学し、現在は石巻市内の仮設住宅で生活しながら、就職活動中という鈴木さん。「仮設住宅の暮らしでは、日赤からの家電セットが本当に役立っています。今日はお世話になっている日赤のお手伝いが少しでもできればと思います。ライブも思いっきり楽しみたいですね」と笑顔を見せ、来場者へのＰＲグッズ配りに奮闘してくれました。

証言 3・11東日本大震災

手探りで始めた救護活動

盛岡赤十字病院

「どこに何人が避難しているのかも分からない。避難所を訪ね歩いて被災者の声を拾い、医療ニーズを探すところから始めました」（佐々木医療社会事業課長）

東日本大震災で全国最多となる97班（７月末現在）の救護班を派遣した盛岡赤十字病院。その活動は手探り状態からのスタートでした。

県災対本部から沿岸派遣の許可を得、同病院と全国から集まった赤十字救護班での合同ミーティング

来なかった負傷者

盛岡赤十字病院が災害対策本部を設置したのは、地震発生から４分後の３月11日午後２時50分。直ちに救護班が編成され、出動準備も整えました。

すぐに沿岸部へ出動させるつもりでしたが、県災害対策本部の判断もあり、救護班派遣よりも負傷者受け入れの優先を決定。「沿岸部から負傷者が続々と運ばれてくるとの想定でした」（久保第一脳神経外科部長）

ところが、大量の負傷者は来なかったのです。病院から車で10数分の岩手消防学校に展開したｄＥＲＵ（移動式仮設診療所）に震災の翌日運ばれた患者はわずか８人という状況でした。

被災地沿岸部へ

12日朝に自衛隊ヘリで大船渡市へ飛んだ川村第二外科部長は「外傷者は少なく、溺れかけた方がほとんどでした。生きるか死ぬかのどちらかが津波災害の特徴」と負傷者が少なかった状況を振り返ります。

こうした事態に同院はその日の夕方、沿岸部への救護班展開を開始しました。

この間、全国からの赤十字救護班も続々と盛岡へ集結。各救護班の派遣先振り分けも同院に任せられることになります。しかし、そのために必要な情報はほぼゼロ。「まずは現地に行ってもらい、彼らからの情報を基に次の展開を考える状況でした」（佐々木課長）

不十分な情報下での活動に「当初1週間は災害拠点病院として役割を果たしていたのか不安だった」と語る沼里院長

必要だったのは薬

３月13日。被災地入りした他県の救護班からの「慢性疾患の薬を希望される被災者が多い」などの報告を踏まえ、救護活動の柱は慢性疾患患者への対応に変更。高血圧や糖尿病の薬などが準備されることになりました。

及川看護副部長は「津波でお薬手帳を失った方に同じ薬を処方するため、薬剤師の救護班員が薬の色や形を聞き取り、薬の種類を推測したりもしました」と当時の状況を伝えます。

３～４月の頃には１カ所の救護所に１日２００人を超える被災者が押し寄せる日も。その多くが慢性疾患や不眠・不安を訴える高齢者でした。

盛岡赤十字病院は岩手県基幹災害拠点病院（災害救援センター）に指定されている

使命感が支えた救護活動

盛岡赤十字病院の救護班は県内最大の被災地となった陸前高田市を中心に展開。延べ６４８人の職員が活動に参加してきました。

「職員の中には家族を失ったり、実家を流された職員も少なくありません。それでも救護班に参加したいという者もいました」（北村看護部長）

救護班派遣は７月末で終了しましたが、岩手県沿岸部の病院にはまだ再開できないところも。仮設診療所での診療が中心で、検査などの制限により診療体制に懸念も出されています。

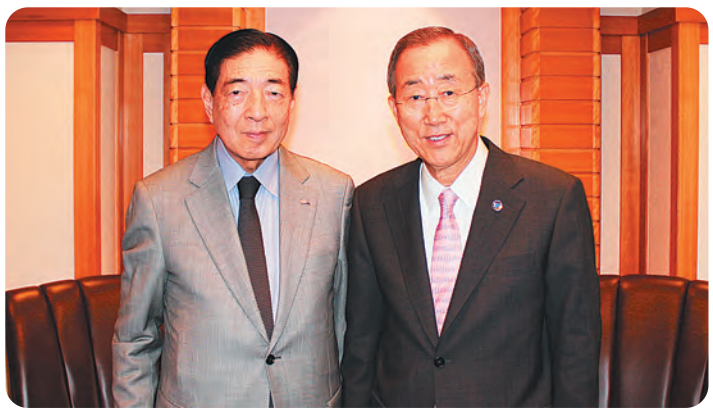
沼里院長は「被災地の医療ニーズに応えていくため、今後もできる限り支援をしていきたい。そのためにも、職員の力量アップ、経営改善などを図り、病院としての体力をつけていきたい」と決意を語っています。

（９面に関連記事）

「原子力災害による人道被害への備えを」

潘基文・国連事務総長、天野之弥・国際原子力機関（IAEA）事務局長と近衛社長が意見交換

「赤十字は原子力災害への備えとともに、被災者救援に関心を持たなければならない」――国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の会長を務める近衛忠煇・日本赤十字社社長はこのほど、日本を訪問中の潘基文・国連事務総長、天野之弥・国際原子力機関（IAEA）事務局長と相次いで会談。将来の原子力災害に赤十字としても備えを進めるべきだとの考えを示し、国際社会の協力を呼びかけました。



近衛社長と潘基文国連事務総長（右）

IFRC総会で原子力災害を議論

潘事務総長との会談は8月9日に都内で開かれました。

近衛社長は会談の中で「今年のIFRC総会では、各国赤十字社・赤新月社（各社）が原子力災害にいかに備えていくのかが議論になる」と紹介。また日赤が、広島・長崎での被爆者治療の経験を生かし、チェルノブイリ原発事故の被ばく者支援を行ってきたことに触れながら、「原子力災害における経験の共有化を各社と日赤とで図っていきたい」とIFRCとして原子力災害に取り組む意義を説明しました。

一方、高校時代に米国赤十字社の招待を受けて同国を訪問したことが外交官を志したきっかけという潘事務総長は、紛争地での人道活動で赤十字が果たしている役割に感謝を表明。また、近衛社長の話を受け、9月22日に自身の招集で開催される原発の安全管理をテーマにした国際会議に、近衛社長をIFRC会長として招く意向を表明しました。

福島原発事故で各社の消極姿勢に変化

7月29日に都内で行われた天野事務局長との会談でも、近衛社長は、「赤十字は原発推進、反対のいずれの立場も取らないが、事故への備えと被災者の救援に関心を持つのは当然のこと」と基本的なスタンスを強調。また、以前は核兵器問題と同列に原子力災害への対応を取り上げることに消極的だった各社が、福島原発事故を受けて強い関心を示すようになっていることを紹介。「原子力災害に対して、赤十字は何ができるのかを検討する機が熟してきた」と述べました。

天野事務局長は、原発事故への対応、被ばく者治療について「国際的な取り組みを強化する必要がある」と表明。すでにIAEAは2010年に世界保健機関（WHO）などとの間で共同計画を策定していますが、こうした計画の中で「赤十字との連携の可能性がある」との見解を示しました。

右は天野之弥国際原子力機関（IAEA）事務局長

「国際災害対応法」の準備を

潘国連事務総長、天野IAEA事務局長との会談で、近衛社長が共通して提起したのが、災害発生時に海外からの支援を円滑に受け入れるための国際法の整備です。

自然災害下での国際人道支援の際に適用される国際法はなく、IFRCは4年前に「IDRL」（国際災害対応法）のガイドラインを策定。その普及を各国に呼びかけています。

近衛社長は東日本大震災で海外からの支援を受け入れる際にも混乱があったことを指摘。その上で「先進国も含めた各国が、海外からの支援受け入れを想定し準備することが重要」とIDRLの意義を強調しました。さらに「原子力関連災害での国際協力に際しても、IDRLの枠組みが活用できるのではないか」との認識を示しました。

◆IDRL（International Disaster Response Law）

自然災害時の国際支援を円滑に進めるための国際災害対応法。IFRCは「支援が人道、中立、公平の原則に従って提供されること」などをガイドラインに定めている。

先駆者たち ～The History～ Vol. 2

高松凌雲

戊辰戦争で赤十字精神を実践

「負傷して戦えない者に敵味方の区別はない」――新政府軍と旧幕府脱走軍との最後の戦いとなった箱館※戦争で、両軍の負傷者救護に奔走した一人の医師がいました。将軍徳川慶喜の奥詰医師（専属医師）を務めた高松凌雲です。凌雲が赤十字精神を発揮しえたのは何故なのか。そこには日本赤十字社の創立者佐野常民とも共通する体験がありました。

パリ市民病院で人道思想学ぶ

久留米藩出身の凌雲は、江戸での修行を経て、大坂※の適塾に入学。高名な蘭学者、緒方洪庵に師事します。この適塾で医学や蘭学を学んだ先輩の一人が常民でした。常民は、人命尊重の精神をここで洪庵から学びました。

慶応3（1867）年、凌雲はパリ万博への幕府代表団に医師として加えられます。万博には常民も佐賀藩代表団の一員として参加。発足したばかりの赤十字が万博に出展しており、常民はこの地で赤十字思想と出会ったといわれています。

万博後、凌雲はフランスへ残り、パリ市民病院へ留学します。市立函館博物館の学芸員・保科智治さんは「凌雲が万博で赤十字の展示を見たかどうかははっきりしません。しかし、パリ市民病院は貧民救済事業を営んでいました。ここでの体験を通じて、〝敵味方の区別なく〟という人道思想に触れたのは間違いないと思います」と推測します。

病院の中立確保に尽力

帰国後、凌雲は榎本武揚らが率いる旧幕府脱走軍に参加。戊辰戦争最後の戦場となった箱館へ共に渡り、野戦病院となる箱館病院の院長を任せられます。この任を引き受ける際、凌雲は榎本らに「負傷兵は敵でも治療する」という条件を提示します。

箱館戦争で使われた大砲。新撰組副長の土方歳三も箱館戦争で戦死している

明治21年、凌雲は日本赤十字徽章を授章

フランス留学から持ち帰った医療器具は、箱館病院での治療に使われた

「箱館病院が治療した傷病兵は1340人。そのうち新政府軍兵士は、戦争初期に負傷した6人足らずですが、凌雲は彼らを治療し、新政府側に送り届けました。また、戦争が激しくなった段階では、新政府側からも〝病院は攻撃しない〟との約束をとりつけました。病院の中立を維持することで、大勢の負傷兵を救ったのです」（保科さん）

戦いの帰趨が決着しようとする中、新政府軍の降伏勧告を旧幕府脱走軍に仲介する役割も凌運は担っています。中立の病院という立場だからこそできた橋渡し役でした。

生涯を貧民救済事業へ

明治政府の基盤が築かれる中、凌雲には軍医として任官する話が持ち込まれます。さらに、西南戦争のおりには佐野常民から博愛社設立への協力要請を受けます。しかし、これらの誘いを凌雲は断り続けます。

保科さんは次のように語ります。

「凌雲は〝二君に仕えず〟の意識だったと思います。徳川慶喜が凌雲に贈った書には『至誠一貫』（真心を持って相手に尽くすの意）という言葉が書かれていますが、こうした彼の生き方への感謝が込められているのではないでしょうか」

明治12年、凌雲はパリ市民病院で学んだ貧民救済事業を実践するための民間組織「同愛社」を設立。貧しい人々の無料治療や保健衛生の改善事業などに生涯を捧げました。

※「箱館」「大坂」はそれぞれ明治以降に「函館」「大阪」へ表記が変更

赤十字NEWS 東日本大震災 活動の記録

編集・発行／日本赤十字社　企画広報室　〒105-8521　東京都港区芝大門1-1-3　TEL:03-3438-1311

いのちを守り こころをつなぐ

救護・支援活動　昨日から明日へ

あの日から間もなく半年。がれきの山に立ちすくみ、一日をとにかく生き抜いた日々は、少しずつ記憶の中へ。津波に飲み込まれた街も、被災者も、確実に未来へと歩き始めています。私たち日本赤十字社は、そんな被災者へ寄り添い、いのちと健康、そして人間の尊厳を守る取り組みを続けてきました。この活動の記録を、震災の記憶とともに未来へと引き継いでいく。それもまた私たちの責任です。

東日本大震災から6カ月を迎えて　日本赤十字社社長 **近衛 忠煇**

全国、世界からの心温まる支援に感謝申し上げます

東日本大震災が発生して、6カ月になろうとしています。

震災で亡くなられた方々へ改めて哀悼の意を表すとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

私も直後に被災地を訪れましたが、あまりに甚大な被害を前に言葉を失いました。この深刻な事態に「いまこそ赤十字は、災害救護のプロとして被災者のために活動を」と全職員、ボランティアが一丸となって支援を行ってきました。

同じように全国の皆さまが「何か力になりたい」と日本赤十字社に多くの義援金を寄せてくださいました。その数はおよそ250万件、受付金額は2800億円を超えています。皆さまの尊いお気持ちに、深く感謝申し上げます。

お預かりした義援金は、手数料などを一切いただかず全額を被災都道県に配分し、市町村を通じて被災者に届けられています。当初、行政被害も深刻であったため、各被災者への配分作業が滞ることもありましたが、現在は、対象被災者のほとんどへ配分義援金をお渡しすることができています。

しかし、被災地の復興にはまだ多くの支援が必要です。引き続き、皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

今回の震災では、世界中の人々からも各国赤十字を通じて、400億円を超える支援をいただきました。日赤が、世界186カ国に広がる国際的な人道ネットワークの一員であることを改めて実感しています。この海外からの支援は、仮設住宅への家電セット寄贈をはじめ、医療や福祉、教育などの分野で活用されています。

一方、福島第一原子力発電所の事故を受けて、原子力災害による被災者支援に赤十字としてどう向き合うのかという新しい課題も浮き彫りになりました。福島の原発事故被災者の健康管理支援や、将来起こり得る同様の事故に対する備えなどについて、原発保有国の赤十字社などと今後協議を進めていく所存です。

日本赤十字社はこれからも、国内外の皆さまの「苦しんでいる人を救いたい」という思いを結集し、人間のいのちと健康、尊厳を守る活動に取り組んでまいります。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

REPORT

東日本大震災 被災者支援

赤十字の使命をかけた6カ月

救護班派遣場所
巡回診療地域
赤十字病院
各都道府県支部
救援物資

青森県
救護動員数 24人
診療した被災者数 323人
毛布 937枚

秋田県
緊急セット 210セット

岩手県
活動救護班数 302班
診療した被災者数 28,836人

毛　　布 1,000枚
緊急セット 11,682セット
安眠セット 5,000セット

盛岡赤十字病院

宮城県
活動救護班数 370班
診療した被災者数 45,518人

毛　　布 88,490枚
緊急セット 16,236セット
安眠セット 6,000セット

石巻赤十字病院
仙台赤十字病院

山形県
活動救護班数 1班
診療した被災者数 69人
毛布 2,750枚
緊急セット 40セット
学用品セット 133セット

福島赤十字病院

福島県
活動救護班数 123班
診療した被災者数 6,998人

毛　　布 16,020枚
緊急セット 2,340セット
安眠セット 2,500セット

※地図上の数字は8月19日現在のもの

INTERNATIONAL RELIEF

子どもたちの笑顔を応援する「KIDS CROSS project」。園児と保護者を対象にした健康安全教室では、熱中症予防やこころのケアについて学習(7月11日、岩手県山田町山田幼稚園)

INTERNATIONAL RELIEF

©Nobuyuki Kobayashi

仮設住宅入居者への生活家電セット(洗濯機、冷蔵庫、テレビ、炊飯器など6点)寄贈事業は東北3県を中心に11万世帯が対象。8月24日までに9万1439世帯へ寄贈

MEDICAL SUPPORT

震災から1カ月余りにわたり岩手、宮城、福島の血液センターは献血者受け入れを休止。全国各地から陸路や空路で血液製剤が運ばれ、医療機関への安定供給を確保した

MEDICAL SUPPORT

震災後、被災地では人員不足に陥る社会福祉施設も。日赤は岩手県陸前高田市、大槌町の社会福祉施設へ介護士を派遣し、高齢者介護を支援

MEDICAL SUPPORT
救護班やこころのケアチームに派遣された「こころのケア」要員は延べ580人(8月19日現在)。被災者1万3000人以上のストレス軽減などに取り組み、現在も活動を継続中。

INTERNATIONAL RELIEF
介護用ベッドの寄贈は、被災県の高齢者施設などが対象。合計1000台を贈る計画で、8月12日現在、岩手、宮城、福島県の115施設に673台を寄贈

VOLUNTEER

©Ichigo Susawara

3回にわたり被災地を訪問した広報特使の藤原紀香さん。炊き出しの手伝いやリラクゼーション指導などに参加し、「日本中、世界中の人が皆さんを応援しています」と被災者を激励

MEDICAL SUPPORT

大きな被害を免れた石巻赤十字病院。運ばれた患者は震災1カ月余りで1万人を超えるなど被災地の医療を支えた。スタッフの一人は「津波で溺れた患者さんがビニールシートに覆われ、次々と運ばれてきた。ガソリンと混ざった海水を飲み込み、肺炎が心配される人もいた」と直後の緊迫を振り返る

MEDICAL SUPPORT

全国の支部から延べ819班、およそ6500人以上(8月19日現在)が出動。拠点となる避難所に救護所を開設したほか、地域を巡回診療し、被災地の医療ニーズに応えた

INTERNATIONAL RELIEF
避難所の衛生環境改善へ、石巻市内9カ所の避難所へ給水設備を設置。岩手県山田町の避難所等5カ所にはシャワー設備を整備

MEDICAL SUPPORT
岩手県陸前高田市立第一中学校の避難所を拠点とする「看護ケア班」は、病気予防のための生活指導などを実施

VOLUNTEER

炊き出しで提供した温かい食事は、多くの被災者に喜ばれました。写真の会津若松女子赤十字奉仕団は3月16日から1カ月間、毎日300食の炊き出しを継続

他県(東北以外)の救護班の活動数、救援物資の支援状況

支援県名	救護班（dERU等含む）	毛　布
北海道内	5班	
茨城県内	11班	3,000枚
栃木県内	2班	15,000枚
千葉県内	2班	
長野県内	2班	

※安眠セットは宮城県、岩手県、福島県のみに輸送。
緊急セットは宮城県、岩手県、福島県、秋田県、山形県のみに輸送。

迅速かつ公平に──義援金配分

日本赤十字社へ託された義援金は総額**2816億9911万円**(8月24日現在)。中央共同募金会に寄せられた363億6948万円(8月24日現在)を併せ、義援金配分割合決定委員会の決定に基づいて8月22日までに両団体から被災都道県へ**2861億9039万円**が送金されています。日赤や中央共同募金会など義援金受付団体に寄せられた義援金は、自治体を通じて、全額が被災者の方々へ届けられます。

義援金の流れ

義援金 個人・法人の皆さま → 募金など → 日本赤十字社 赤い羽根共同募金（日赤・中央共同募金会などの義援金受付団体） → 義援金配分委員会（各被災都道県ごとに設置） → 被災市町村 → 被災者の皆さま（義援金配分委員会を通じて全額被災者の皆さまへ）

いのちを救い、健康を守る医療救護活動

死者・行方不明者2万人という戦後最悪の被害をもたらした東日本大震災。日赤は過去最大規模の医療救護班を出動させるなど、被災者のいのちと健康を守る活動を展開してきました。現在も、慢性疾患を抱えた高齢被災者へ対応、精神的なダメージに苦しむ被災者に寄り添う「こころのケア」、避難生活を健康に過ごすための生活指導に取り組む「看護ケア班」など、きめ細かな体制で被災者をサポートしています。

MEDICAL SUPPORT

支え合う力が赤十字の誇り 奉仕団のボランティア活動

「少しでも被災者の役に立ちたい」──そんな気持ちを胸に、全国の赤十字奉仕団がボランティア活動を展開しています。炊き出しや給水作業の手伝い、無線による情報収集、被災家屋の片づけなど被災地での活動のほか、それぞれの地元でも街頭募金などに協力。参加は延べ2625奉仕団、7万2305人(8月19日現在)に上っています。

VOLUNTEER

世界の善意を被災地へ 海外救援金による復興支援事業

被災者の生活再建を応援する復興支援事業。世界の赤十字社から寄せられた海外救援金をもとに日赤は、家電セット寄贈、高齢者施設への介護ベッド寄贈、教育支援、医療復興支援などに取り組んでいます。それぞれの支援策は「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という赤十字の使命に則して具現化。日赤の持つ知識・技術・人材を生かし、健康教室や高齢被災者のサポートなど顔の見える支援にも取り組んでいます。

INTERNATIONAL RELIEF

東日本大震災 日赤の支援活動 半年間の軌跡

3月

日本全体の動き

- 14:46 三陸沖を震源とするM8.8（後に9.0へ変更）の巨大地震が発生 東京電力福島第一原発、東北電力女川原発など計11基が自動停止

- 15:18～50 三陸沿岸へ津波の最大波が来襲。岩手県宮古市では津波は38.9mまで到達（東京海洋大学調査）
- 21:23 福島第一原発の半径3km以内の住民に避難指示

日本赤十字社の動き

11日

- ◆日赤本社に災害対策本部を設置、即座に先遣隊を派遣
- ◆本社および支部より救援物資（主に毛布）の輸送開始
- ◆**全国から55班の救護班が被災地へ向け出動**

- 19:30 秋田赤十字病院の救護班第1班が岩手県陸前高田市で救護活動開始

日本全体の動き

- 18:25 福島第一原発の1号基建屋爆発を受け、半径20km以内に避難指示

12日

- 02:26 八戸赤十字病院のDMAT（災害派遣医療チーム）が石巻赤十字病院へ到着。以降、DMAT、救護班が同院へ集結
- ◆岩手県立釜石病院、花巻空港で諏訪日赤DMAT、大津日赤DMATなどが活動開始
- ◆赤十字国際委員会（ICRC）と協力し、安否調査サイト（Famisy Links）開設
- ◆宮城県に現地災害対策本部を設置
- 17:00 宮城県庁前にdERU（移動式仮設診療所）を展開し、無料診療開始

日本全体の動き

- ◆気象庁が地震規模をM8.8から9.0へ変更

13日

- ◆**こころのケア指導員2人を宮城県へ派遣**
- ◆**近衛忠煇社長が被災地視察（～14日）**

日本全体の動き

- ◆東京電力が計画停電を初めて実施

14日

- ◆義援金受付開始
- ◆ボランティアリーダー1人が新潟より宮城県支部に到着。宮城県にボランティアセンター立ち上げ。その後、本社、岩手、福島、茨城にも順次設置
- ◆石巻赤十字病院への看護支援へ、全国7カ所の赤十字病院の看護師・助産師18人が第1班として活動開始

15日

- ◆**救護班の出動班数が100を突破（dERUを含む）**

日本全体の動き

- ◆石巻市で倒壊した家屋から80歳の祖母と16歳の孫の少年を救出。石巻赤十字病院で治療

20日

- ◆宮城県の「石巻圏合同救護チーム」発足。石巻赤十字病院が拠点に

22日

- ◆大塚日赤副社長が岩手・宮城・福島県知事と面会（～24日）

日本全体の動き

- ◆東北自動車道全面再開

24日

- ◆「安眠セット」（マットレス、空気枕、アイマスクなど）の配付開始

4月

日本全体の動き

- ◆政府が震災の名称を「東日本大震災」と命名

1日

- ◆**救護班の出動班数が500を突破（dERUを含む）**
- ◆**義援金が1000億円を突破（日赤受付分）**

日本全体の動き

- ◆菅首相が岩手県及び福島県を訪問

2日

日本全体の動き

- 23:32 宮城県沖を震源とするM7.4の地震発生。一時400万戸が停電

7日

- ◆**生活家電セット 第1回寄贈**（岩手県陸前高田市の仮設住宅）

日本全体の動き

- ◆有識者、被災自治体、日赤、中央共同募金会による義援金配分割合決定委員会設置、第1回開催
- ◆義援金第一次配分基準決定

8日

日本全体の動き

- ◆義援金第一次配分の被災都道県への送金開始
- ◆津波で水没した仙台空港が再開（国内便の一部）

12日

- ◆広報特使・藤原紀香さん1回目の被災地訪問（～13日）

13日

- ◆避難所への給水設備設置を開始（宮城県石巻市）
- ◆**介護チーム第一次派遣**（～5月13日まで、岩手県陸前高田市の介護施設へ、延べ35人を派遣）

日本全体の動き

- ◆第1回　東日本大震災復興構想会議開催

14日

16日

- ◆日赤秋田県支部が派遣した「健康生活支援チーム」が岩手県陸前高田市内の避難所10カ所を訪問し、災害時高齢者生活支援講習を実施（～17日）

日本全体の動き

- ◆寸断していた東北新幹線が全線で復旧、運行再開

18日

- ◆被災3県で献血者の受け入れ再開

20日

- ◆全国92の赤十字病院の院長でつくる院長連盟が日赤本社で情報交換会を開催し、東日本大震災での救護班活動の今後の課題について意見交換

29日

5月

日本全体の動き

- ◆中部電力浜岡原子力発電所の停止を菅首相が要請

5日

6日

- ◆広報特使・藤原紀香さん2回目の被災地訪問（～6日）

9日

- ◆東日本大震災・支援国赤十字社会議（～11日）。海外救援金による被災者支援についての協議と被災地視察

日本全体の動き

- ◆福島第一原発の1号機が3月12日段階でメルトダウンしていたと東京電力が発表。同原発の2・3号機のメルトダウンも5月24日までに判明

12日

- ◆海外救援金による復興支援策決定

15日

18日

日本全体の動き

- ◆東日本大震災後に岩手、宮城、福島の3県で雇用保険の離職票の交付を受けた人が10万6461人（速報値）になったと厚労省が発表

20日

- ◆**義援金が2000億円を超える（日赤受付分）**

22日

- ◆福島第一原発爆発事故による周辺住民の一時帰宅を救護班がサポート（継続中）

30日

- ◆石巻赤十字看護専門学校で1カ月遅れの入学式。6月1日から石巻専修大学の校舎の一部を借りて授業再開

日本全体の動き

- ◆第2回義援金配分割合決定委員会開催
- ◆義援金第二次配分基準決定

31日

- ◆介護チーム第二次派遣開始（～7月1日、岩手県大槌町の社会福祉施設へ35人の職員派遣）

6月

2日

- ◆**看護ケア班第1班派遣（陸前高田市）**

6日

日本全体の動き

- ◆義援金第二次配分の被災都道県への送金開始

13日

17日

- ◆**宮城県内の福祉施設へ合計373台の介護用ベッド寄贈開始**

日本全体の動き

- ◆復興の枠組みを定めた復興基本法成立

20日

日本全体の動き

- ◆東日本大震災復興構想会議が「復興への提言」を発表

25日

日本全体の動き

- ◆中央防災会議の専門調査会が「あらゆる可能性を考慮した最大規模の巨大地震・津波への備えを」と中間とりまとめ

26日

7月

日本全体の動き

- ◆電気事業法に基づく「電力使用制限令」を東京電力・東北電力管内で発動。1974年以来、37年ぶり

1日

- ◆岩手県山田町に、コンテナシャワー設置開始。8月下旬までに避難所・消防署に合計6台を設置

11日

- ◆「KIDS CROSS project」の第1回事業として、岩手県山田町の幼稚園で健康安全教室開催

日本全体の動き

- ◆サッカーの女子W杯で日本女子代表（なでしこジャパン）がアメリカ代表を破り初優勝（日本時間7月18日未明）

16日

17日

- ◆平成23年度の第1回日赤DMAT（災害派遣医療チーム）研修会を兵庫で開催（～18日）

仮設住宅の整備（すでに入居済み）

19日

- ◆岩手・宮城・福島県の避難所144カ所に、「夏快適セット（冷感タオル、防虫スプレー、収納ケースなど）」配付（～29日）

日本全体の動き

- ◆岩手県が自衛隊に撤収要請。陸前高田市で活動していた自衛隊は7月20日に撤収を完了

22日

- ◆広報特使・藤原紀香さん3回目の被災地訪問（～23日）

26日

- ◆岩手県内の福祉施設へ合計204台の介護用ベッド寄贈開始
- ◆栃木県のJRC（青少年赤十字）高等学校メンバーや指導者ら29人が陸前高田市でがれき撤去のボランティア活動。JRCとして初の被災地ボランティア

仮設住宅の前でトマトときゅうりを栽培するご夫妻

29日

- ◆陸前高田市に残った岩手県内最後の救護所を閉鎖。地元医療機関へ医療を引き継ぎ

8月

日本全体の動き

- ◆宮城県が自衛隊に撤収要請。同月までに活動終了

1日

2日

- ◆福島県内の福祉施設へ合計96台の介護用ベッド寄贈開始

日本全体の動き

- ◆福島第一原発事故の賠償へ向けた「原子力損害賠償支援機構法」が成立

3日

- ◆ボランティアセンター支援開始。宮城・岩手県の合計11カ所のセンターに対して、フライテント・AED・救急箱などの備品を寄贈予定

6日

日本全体の動き

- ◆「鎮魂」と「復興」をテーマに仙台七夕まつり開幕（～8日）

17日

- ◆保健室備品整備開始。身長計・体重計など保健室に必要な備品を宮城県内の小中高校へ寄贈（～10月）。岩手県は9月から寄贈予定

19日

- ◆「南三陸町生活支援バス」試験運行開始。9月1日から南三陸町と隣接する登米市を結ぶバスが1日約3往復運行予定（～平成24年3月31日）

献血はいのちのリレー つなぐのは私たちです!

和やかな雰囲気の中でこそ、豊かなアイデアがわいてきます

全国学生献血推進代表者会議を札幌市内で開催

若者の献血拡大へ 広報アイデアを交流

献血推進活動に取り組む大学・短大、専門学校の学生で組織する全国学生献血推進協議会（全国4973人）の代表者会議が8月10日から12日まで、札幌市内で開催され、各都道府県代表者ら90人が参加。若年層の献血協力者拡大へ向けた広報活動のあり方などについて議論しました。

昨年1年間の献血者は約533万人。その血液によって1日平均3000人（推定）のいのちが救われています。しかし10代、20代の若者の献血が10年前と比べ40%も減少するなど、このまま推移すると2027年には年間100万人分の血液が不足すると推測されています。

代表者会議はこうした将来不安を打開するための方策を若者自身の力で探っていこうと開催されたものです。

南沢奈央さん（左）と一緒にけんけつちゃんも会議を盛り上げました

ネット活用も効果は限定的

会議では、輸血の実態を改めて学んでいこうと、肝移植手術の様子や輸血によって元気になった患者さんのメッセージを収めたビデオが北海道大学病院の嶋村剛医師により紹介されました。

その後、「同世代から同世代への効果的な広報」というテーマで討論。若者の献血協力を増やしていくには、どのような広報が効果的かのアイデアを出し合いました。

実践報告では、献血の呼びかけにツイッターや交流サイトのミクシィなどネット上のコミュニケーションツールを活用している事例も。しかし、これらを実際に使っているメンバーからは「友人までが限界。より多くの若者に伝える方法はポスターが有効だ」といった意見も出されました。

全国代表を務める角田藍美さん（北海道大学3年）は「若者を振り向かせるためには若者である私たちの感性が役立つはず」と広報活動への意欲をのぞかせました。

女優の南沢奈央さんも応援

会議には学生献血応援キャラクターとして、献血推進映画「八月の二重奏」（2010年製作）の主演を務めた女優の南沢奈央さんもゲスト参加。「私も皆さんと同世代の一人として、今秋には高等学校にも足を運び、献血の必要性を訴えていきます」と今後の抱負を語りました。

福島県只見町朝日地区センター避難所での救護活動

新潟・福島の大雨災害で 医療救護班派遣 避難所には緊急物資を配付

新潟・福島　2011.07.30

7月28日から30日までの記録的な大雨で死者・行方不明者6人、住宅損壊や床上・床下浸水8800戸以上という被害に見舞われた新潟県と福島県。両県支部ではそれぞれ医療救護班１班を派遣するとともに、避難所に逃れてきた方への毛布や緊急セットの配付を行いました。

気象庁によると、今回の大雨では3日間の雨量が局所的に1000ミリを超えるなど各地で観測史上最大の雨量を観測。避難指示・勧告を出された世帯も両県で15万6000世帯を超えました。人的被害に加えて住宅や農作物被害、河川堤防の決壊、土砂崩れなども発生し、その爪あとは多方面に及んでいます。

こうした事態に、新潟県支部は長岡赤十字病院の医療救護班1班を7月30日に三条市へ派遣。福島県支部でも同日、福島赤十字病院の医療救護班を只見町の避難所に派遣しました。また、被災市町村からの要請を受け、新潟県支部では三条市などに対し毛布約4000枚、日用品などが入った緊急セット約380個を配付。福島県支部も只見町へ緊急セット180個を配付しました。これらの救援物資は、近都県の赤十字支部から提供を受けたもので、その積み降ろしは赤十字ボランティアの協力を得て行われました。

明日からのさらなる復興を信じて笑顔の閉所式

東日本大震災 岩手県内最後の救護所で閉所式 地元医療機関へバトンタッチ

岩　手　2011.7.29

岩手県陸前高田市の市立第一中学校に設置されていた日本赤十字社の救護所が7月29日に閉所され、同日閉所式が行われました。岩手県支部から派遣された盛岡赤十字病院の医療チームはあいさつで「救護所は撤収しますが、日赤は引き続き復興に向けた支援に取り組んでいきます」と決意を表明しました。

東日本大震災で日赤が派遣した救護班は819班（8月19日現在）。延べ8万1400人以上の被災者を診療してきました。17カ所に302班が派遣された岩手県内にあって、高田市立第一中学校の救護所は発災当日に開設された第1号の救護所で、多い日には1日200人を診療。地元の医療機関の復旧にあわせ、救護班が順次縮小される中、最後まで活動を継続してきました。

今回の閉所は、県立高田病院が7月25日から仮設診療所での診療を再開したことを受けたもの。閉所式に参列した陸前高田市の戸羽太市長は「発災直後のパニック状態の中、いち早く駆け付け、長期間にわたり全力を尽くしてくれた。皆さんが去られることを平穏に近づいている兆しと捉え、市民一丸で頑張っていきたい」と謝意。住民の一人は「避難所のすぐ近くに救護所があって心強かった。なくなるのは寂しいが、感謝の気持ちで見送りたい」と語りました。

現地で歓迎を受け、たくさんのプレゼントに戸惑う高校生メンバー

8人の中高生が バングラデシュを訪問

千　葉　2011.7.24～29

千葉県支部が派遣した青少年赤十字（JRC）の代表8人が7月24～29日、バングラデシュを訪問。貧困のために十分な教育を受けることができない同国の子どもたちに対する支援事業などについて学びました。参加したのはJRCスタディーセンターでリーダー研修を受けた8人の中・高校生です。

日赤は2003年からバングラデシュやネパール、モンゴルの3カ国を対象に、教育支援として文具セット提供、学校への衛生設備・保健室設置、保健衛生の知識普及を行ってきました。同支部もJRCによる1円募金なども合わせて、バングラデシュ赤新月社の支援に取り組んでいます。

派遣されたメンバーは1日300キロの道のりを移動し、地方の学校で行われる文具セット寄贈式や交流会などに参加し、歓迎を受けました。銚子市立高校2年の広谷裕佐くんは「日本と比べて圧倒的に物が不足しています。その反面、心は日本以上に豊かです。物を大切にする気持ちは私たちが忘れがちなものです」という感想を寄せ、継続的な支援の必要性も訴えています。

派遣団は今秋開かれる帰国報告会で、自分たちが見たバングラデシュの現状と、教育など支援事業の成果を伝えることにしています。

東日本大震災 ＪＲＣの高校生メンバー 被災地でボランティア

JRC加盟校メンバーによる被災地ボランティアは今回が初めて

栃　木　2011.7.28

栃木県青少年赤十字（JRC）の加盟高等学校の高校生メンバーら29人が7月28日、陸前高田市気仙町でがれき撤去のボランティア活動に参加しました。6班に分かれたメンバーは一般ボランティアと共に、かわらの破片や砕けた食器類、水に浸かった本や段ボール、衣類などを分別。午前・午後約3時間半の作業で、分別されたがれきの山がいくつもできました。

JRCの参加メンバーからは「活動することで、被災地の現状を知ることができた」「外国人ボランティアの姿を見て、海外の人も日本を応援してくれているとうれしくなった」などの感想が出されました。

東日本大震災 指導者12人が こころのケアを検証

真剣な議論が交わされたグループワーク

北海道　2011.8.5

東日本大震災におけるこころのケア活動を振り返る報告会が8月5日、北海道支部で行われました。北海道から被災地へ派遣したこころのケア要員は延べ60人で、報告会にはこころのケア指導者12人が参加。今後の災害救護につなげることを目的に、教訓や課題を出し合いました。

討論では、こころのケア要員を北海道から継続派遣してきたことや、指導者の下での組織的な活動が展開できた点などについて前向きな評価が。一方、不十分だった点として、「他機関との横のつながりが不明確」「赤十字こころのケア活動の認知が不足」などの課題を指摘する意見が出されました。

チームワーク力を高める体験プログラム「ヒューマンチェーン」に取り組む（大阪）

仲間とともに体験学習 ＪＲＣ夏のトレセンでキラリ成長！

全　国　2011.7～8

体験学習やグループ活動などを通じて赤十字について学び、ボランティア精神とリーダーシップを育む青少年赤十字（JRC）のトレーニングセンター（トレセン）が今年の夏も全国で開催されました。

8月4～6日の3日間の日程で開催された宮崎県支部のトレセンには小学生から高校生までのJRCメンバー96人が参加し、応急手当やフィールドワークなどに挑戦。「総合的な学習の時間」では、血液と献血について勉強し、献血で助かるいのちがあることを学びました。

大阪府支部のトレセンは8月1～4日まで貝塚市内で開催され、120人が参加。グループごとの活動では、最初は他校のメンバーに緊張気味でしたが、さまざまなプログラムに協力して取り組む中で、「そのやり方はあかん」「これはどうやってやろう」と積極的にコミュニケーションをとる姿が見られました。

北海道支部は3会場で開催。「東日本大震災にかかるワークショップ」に取り組んだ道央では、非常食体験など災害発生時の生活を学習。道北では避難所生活に役立つホットタオルづくりに挑戦しました。老人福祉施設を訪問したのは道南。参加メンバーはゲームなどを通じて高齢者との交流を行いました。

思いやりを育もう 義肢製作所で体験学習 小中学生26人が参加

義足を装着する脇本さんを子どもたちが真剣に見つめます

千　葉　2011.8.9

千葉県支部義肢製作所で8月9日、横芝光町社会福祉協議会が主催する「小・中学生福祉体験学習会」が開かれました。福祉施設などの見学や体験を通して、子どもたちに思いやりの心を育くんでいくのが目的です。小・中学生26人が参加し、義足や義手、補装具などの製品を見学したり、実際に義足をつけた歩行体験に挑戦。義足を利用する脇本富美子さん（64）の体験談を聞き、義足製作所が果たす役割などについて学びました。

義肢製作所は年間1300人を超える見学者や、中学校10数校から職場体験学習を受け入れるなど、福祉教育やキャリア教育に積極的に協力しています。

親子で学んだ 「なるほど献血教室」

針はもちろん刺しませんが、ちょっと緊張した献血疑似体験！

広　島　2011.7.26～28

献血の大切さを学んでもらおうと広島県赤十字血液センターでは7月26～28日の3日間、小学4年生から6年生の児童とその保護者を対象とした「なるほど献血教室」を開催しました。

参加したのは児童189人、保護者133人の合計322人。スライドを見ながら血液・献血について学習した後、血液を成分ごとに分ける様子などを見学。献血バスでは、献血の疑似体験にも挑戦しました。

参加者からは「将来献血して、病気の人を助けたい」（小5）、「父も白血病でたくさんの人の献血のおかげで仕事に復帰できたことがよく分かりました」（小6）などの感想が寄せられました。

チャリティーソング ダウンロードの収益を赤十字に寄付

サインとCDを手渡す拝郷メイコさん（左）

静　岡　2011.7.12

静岡エフエム放送株式会社（K-MIX）から7月12日、静岡県支部の活動資金として4万4300円が寄せられました。

同県支部は「もっと多くの方に赤十字の活動に関心を持ってもらいたい」との思いからK-MIXと共同でチャリティーキャンペーンを展開中。今回寄贈された活動資金は、このキャンペーンのテーマソング『ヒカリ』の着うたダウンロードの収益金が寄せられたものです。『ヒカリ』を作詩作曲したアーティストの拝郷メイコさんも寄贈に際して支部を訪れ、「この収益金を赤十字の活動に役立ててください」と事務局長に目録とサイン、CDを手渡しました。

世代を超えて地域で交流 小清水町赤十字 フェスティバル

JRC加盟校の児童も車いすを体験

北海道　2011.8.2

北海道小清水町の赤十字奉仕団と青少年赤十字（JRC）加盟校が主催する「2011小清水町赤十字フェスティバル」が8月2日、同町のトリム公園で開催されました。今年で9回目を迎えたフェスティバルは、町をはじめ教育委員会、社会福祉協議会、消防署など地域全体の協力を得て開催されているものです。

「見つめよう今、ひとの命とやさしさ」をテーマにした今年は約130人が参加。災害非常食作りやAED（自動体外式除細動器）を用いた心肺蘇生法、応急手当の実習、高齢者疑似体験、介護車両試乗体験などが行われ、参加者からは「毎年楽しみにしている。来年も参加したい」との声が聞かれました。

BOOK

『わたしの中の赤十字』

日本赤十字社「もっとクロス！」応援プロジェクト編

B6判160頁/1,260円（税込）

いのちの現場で働く赤十字の職員やボランティアの皆さんが、自らの体験を綴った心温まるエピソード集です。国内外の災害支援や医療活動、献血業務、福祉、ボランティア活動などさまざまな現場からの声に加えて、東日本大震災で全国の赤十字病院から被災地へ駆けつけた救護班員の手記も急きょ収録。赤十字のスローガン「人間を救うのは、人間だ。」の意味を改めて問いかける一冊です。書店での取り扱いはありません。ご注文・お問い合わせは(株)PHP研究所　TEL075-681-1295まで。

※赤十字職員、JRC、ボランティアの方は、ご注文時にお申し出ください。

※(株)日赤サービスの売店（日赤本社内）でも直接ご購入いただけます。

東日本大震災 放射能分析セミナーで 救護活動をＰＲ

東　京　2011.8.4

日本赤十字社は8月4日、都内で開催された「最新分析セミナー2011　放射能分析セミナー～いま我々にできること～」（主催:パーキンエルマージャパン）の会場に赤十字ブースを展開。活動紹介のパンフレットを配付したほか写真パネルの展示やDVD「東日本大震災～被災地での40日間～」を上映し、日赤の医療救護活動をアピールしました。

主催のパーキンエルマージャパンは、放射線測定器などを手がける分析機器の専門メーカー。セミナーは、同社の震災復興支援プロジェクトの一環で、官公庁、メーカー、研究機関、大学などの250人が参加しました。

Voice＆プレゼント

時代が求めている「人道」の精神　磯貝弘（愛知県西尾市）

災害や事故が増え、ますます渾沌（こんとん）とした世の中になっています。このような時代だからこそ、赤十字が掲げる「人道」の精神がいっそう重要になると思います。人道の精神が広まるように、微力ではありますが、これからも活動に協力していきたいと思います。

プレゼント応募方法

以下の項目を明記の上、郵送・FAX・メールにてご応募ください。
上記で紹介した『わたしの中の赤十字』（日本赤十字社「もっとクロス！」応援プロジェクト編）を3名様にプレゼントします。

❶お名前（匿名ご希望の場合はその旨もご記入ください）
❷郵便番号・ご住所
❸電話番号
❹年齢
❺赤十字新聞9月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
❻赤十字新聞へのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

●応募先
・郵送／〒105-8521
東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室
赤十字新聞9月号プレゼント係
・FAX／03-3432-5507
・メール／koho@jrc.or.jp
（件名「赤十字新聞9月号プレゼント係」）
●応募締切／9月26日（月）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

日本災害看護学会大会

参加費無料

2011年9月9日～10日

東日本大震災の救護活動などテーマに

阪神・淡路大震災後の1998年、災害看護の知識・活動の体系化を目的に設立された日本災害看護学会の第13回年次大会（後援＝日本赤十字社ほか）が9月9～10日、さいたま市内で開催されます。

■会　　場　大宮ソニックシティ（さいたま市大宮区桜木町1-7-5）

一般公開プログラム（参加費無料）

■特別講演Ⅰ（9月10日・土 9:00～10:30）
「日航機墜落事故救護活動の体験から～今、語れること、語り継ぐこと～」
座長：浦田喜久子（日赤事業局看護部）
講師：前田陽子（前橋赤十字病院看護部長）

■特別講演Ⅱ（9月10日・土 13:00～14:40）
「地球のステージ～震災を乗り越えて～」
※映像・音楽・語りで綴るコンサート形式の公演です。
講師：桑山紀彦（ＮＰＯ法人 地球のステージ代表理事）

■ワークショップⅤ（9月10日・土 13:00～15:00）
「東日本大震災の被災地における支援活動の経験知と地域防災活動の課題」

■ワークショップⅥ（9月10日・土 13:00～15:00）
「災害看護カフェ」～災害イマジネーションゲームで考える防災と看護～
※事前申込制、詳細はホームページをご確認ください

■公開イベント（9月9日・金 13:00～16:30、10日・土 9:00～15:30）
救急法（心肺蘇生法とＡＥＤの使い方）、救護活動ビデオ上映ほか（日赤埼玉県支部）

■お問い合わせ先
大会事務局（日赤事業局看護部内　tel:03-3437-7505）

※他にも一般公開プログラムがあります。大会の詳細については、ホームページ(http://www.c-linkage.co.jp/saigaikango13/)をご覧ください。

WORLD NEWS

interview　ケニア駐在員　五十嵐真希さん

育ってきた地域保健師と赤十字ボランティア

子どもたちのいのちを救う大きな力に

5歳未満児死亡率が出生1000人に対して84人と日本の30倍に達しているケニア。その原因は保健医療サービスが十分に整備されていないことにあります。日本赤十字社は、こうした劣悪な保健衛生環境を改善するため、ケニア赤十字社とともに地域保健強化事業「Integrated Health Outreach Project（IHOP）」（通称愛ホップ）に2007年末から取り組んでいます。事業開始から3年半。これまでの到達点について五十嵐真希駐在員に話を聞きました。

――IHOPの取り組みを教えてください

ケニアの5歳未満児死亡率の高さは世界でも有数です。しかし、その原因の50%は予防や治療が可能な感染症で、25%は出産時の不十分な処置が原因。そのため、予防接種や清潔な飲料水の確保、出産環境の改善などで、多くのいのちを救うことができます。

IHOPでは村の地域保健師と赤十字ボランティアを通じて住民の間に保健衛生知識の普及を図るとともに、蚊帳の配付やトイレの設置を通して衛生環境の改善、巡回診療と医療施設の機能強化に取り組んでいます。

住民の暮らしに根づくには人材育成から

――支援に際して特に力を入れていることは？

人材育成を大切にしています。IHOPでは84人の地域保健師と赤十字ボランティアが活動しており、保健医療教育や救急法、水と衛生に関するトレーニングなどを受けてきました。皆、村の人々の健康を守りたいと意欲的です。

以前、ほかの支援グループの配付した蚊帳が魚を採る網として使われていたケースがあります。「蚊帳はマラリア感染を防ぐため」という正しい理解がなければ支援は生きてきません。このために地域保健師とボランティアの存在が欠かせないのです。

今ではそれぞれが「病気予防のため、衛生環境の改善が必要」という教育を住民に行っています。こうした取り組みの結果、この3年間で蚊帳を適切に使用する世帯は63%から99%に、子どもの予防接種率も52%から76%へ改善しました。彼らを通じて人々が保健や病気への理解を深めることで、5歳未満児の死亡率改善へとつながっていくと考えています。

支援には村人とのコミュニケーションが欠かせません（中央が五十嵐駐在員）

カギをにぎる男性の意識改革

――せっかく医療施設を整備しても、そこでの出産が広がらないなどの問題もあるそうですが？

医療施設での出産を希望する女性は増えています。しかし、実際に医療施設で出産する割合は残念ながら下がり気味で、昨年は25%を切りました。「夫が許可しない」「男性看護師によるケアが不十分」など理由はさまざま。中でも保健医療に関する男性の理解不足から病院にかかる機会を失うケースが目立ちます。慣習や文化を尊重した上で、男性への保健衛生教育をもっと重視していく必要があると感じています。

長期的な課題になりますから、その役割は地元のボランティアにも担って欲しいと思っています。実は、ボランティアは男女がほぼ半々なのですが、仕事の中で彼らは対等な関係を築いています。こうしたボランティアが地域に認められる活動を継続することで、コミュニティーや家庭の中での女性の立場が改善され、結果的に地域の保健衛生改善へと結びつくのではと期待しています。

地域で調達可能な材料を使い、人々の技術レベルにあわせて作っているので壊れても修繕可能。トイレ普及率は34%から60%に改善しました

ケニア赤十字社主催による東日本大震災の被災者追悼式が3月29日に開かれました。ケニア大学の学生は「上を向いて歩こう」を合唱。高校生からは寄せ書きのメッセージが寄せられました。五十嵐さんの元にもたくさんのお見舞いのメールや励ましのメッセージが届きました

干ばつ襲うアフリカ北東部

1000万人が餓死の危機

国際赤十字が人道支援を拡大

アフリカ北東部に位置するエチオピア、ケニア、ジブチ、ソマリアの各国では、昨年末からほとんど雨が降らず、過去最悪の干ばつに直面。1000万人以上が深刻な食糧危機に襲われています。こうした事態に国際赤十字は大規模な食糧支援や給水・衛生活動を展開。国際社会に対しても緊急アピールを送り、資金援助を訴えています。

ケニア北東部。多くの人は、水を汲みに6時間歩く

過去5年にわたり干ばつが続くジブチの村。25キロを歩いて水を汲みにいくか、軍が運ぶ水を待たなければならない

「国家規模の災害」

過去何度も干ばつによる飢きんに見舞われているアフリカ北東部。1984～85年のエチオピア飢きんでは死者100万人ともいわれる被害が出ました。今回はこれを上回る事態が心配されています。

エチオピアでは8割近い家畜が餓死。政府は「年末までに450万人への食糧支援が必要」と人道支援を求めています。農業生産の著しい減少が続くケニアでは、緊急支援の必要な被災者が5月時点で320万人に上り、政府は「国家規模の災害」を宣言しました。

さらに深刻な状況に陥っているのが内戦の続くソマリアです。武装勢力が、国連機関やNGO（非政府組織）に対し活動禁止令を出すなど、国際支援が妨害されてきたからです。赤十字国際委員会（ICRC）は「ソマリアの栄養失調レベルは頂点に達し、世界最悪を記録している」と警告しています。

日赤も合計6000万円を支援

被災国の赤十字社では、食糧配付や給水・衛生活動、保健サービスの提供などを通じた被災者支援を行っていますが、もはや一国では対応しきれないレベルまで事態は悪化しています。

国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）は、ケニア赤十字社とエチオピア赤十字社の取り組みを支援するため、それぞれ約15億5400万円と約11億6100万円を国際社会へ求める緊急アピール（国際要請）を8月までに発表。緊急援助に加え、農業生産を高めるための中長期的な支援の取り組みを始めています。

一方、他の支援機関の援助が十分に機能しないソマリアに対しては、ICRCがソマリア赤新月社と連携した支援を継続。緊急物資の配付や水の供給、食糧支援、巡回診療などに取り組んでいます。事態悪化を受け、国際社会に対して約127億円の支援要請も行いました。

IFRCとICRCの要請を受けた日本赤十字社はエチオピア、ケニア、ソマリアの赤十字社へ各2000万円の支援を行うことを決定。今後も、国際赤十字と歩調を合わせ、必要な支援を行っていく予定です。